

平成25年度 越谷市民文化祭 第45回

平成25年11月21日（木）～24日（日）
10:00～19:00（最終日は18:00）

郷土研究の部・展示作品紹介

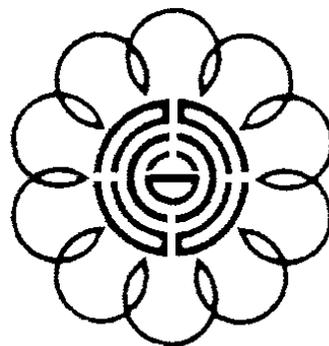
於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ

◇周りの10個の輪は、昭和29年（1954）11月3日に

合併した十町村である二町八ヶ村（「越谷町」誕生）を表す。

ちょうそん こしがやまち おおさわまち さくらむら にいがたむら
十町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・
ましばやしむら おおぶくろむら おぎしまむら でわむら がもうむら おおさがみむら
増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村
をさす。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を4個集めた
ものである。つまり、越谷の『越』（「コ4」）を意味する。



◇中心部のデザインは、越谷の『谷』の文字を図案化したもの
である。

◇昭和30年（1955）11月3日には、草加町に合併して
かわやなぎむら いはら むぎつか うわや
いた川柳村のうち、伊原・麦塚・上谷が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和33年（1958）11月3日に市に昇格し、
越谷市となり、現在に至る。

1. 越ヶ谷の一里塚考
2. 野島の浄山寺周辺のかつての川筋
3. 瓦曾根溜井の変遷
4. 越谷での関東大震災体験者の記録

- | | | |
|------|------------------------|------|
| 大谷達人 | 5. 四本塚（しほんいり） | 秦野秀明 |
| 加藤幸一 | 6. 越谷町百万円事件 | 原田民自 |
| 篠原陸郎 | 7. 越ヶ谷久伊豆神社の一本幟旗の秘話 | 松村宏司 |
| 田中利昌 | 8. 平田篤胤への山崎長右衛門さんからの一札 | 宮川 進 |

1. 越ヶ谷の一里塚考

大谷 達人^{たつを}

一里塚とは、文字通り一里（一里 \parallel 三十六町 \parallel 三九二七m）ごとに有り、街道の^{註1}両側へ小山を築いて植樹し、旅程の目安や緑陰に安らぎを求め、^{註2}掘り所とした。そのルーツは中国に端を発するようだが、ここでは、日本橋を起点とし五街道に^{註3}必ず築かれ、主要な脇往還にも多く見られた江戸時代の一里塚のうち、日光道中の越ヶ谷域に築かれたとされる塚の所在を追跡してみた。

江戸幕府が全国に築造を命じたのは、慶長九年^{一六〇四}とし、十年程で完了したと謂われてきたが、明確な裏付けは無い。越谷周辺では、文化三年^{一八〇六}の『日光道中分間延^{註5}絵図』に、吉笹原村（草加地内）、蒲生村（越ヶ谷地内）、下間久里村（同上）、備後村（粕壁地内）に画している。しかし、蒲生より一里先の越ヶ谷宿内の塚（元荒川右岸道傍）が見られない。この時期既に欠落した儘で補築されなかったからであろう。

また、幕府が直轄する五街道を天保十四年頃^{一八四三}に調査した『日光道中宿村大概帳』^{註6}には、一里塚の立地した場所を記述しているが、越ヶ谷域のものは全て前記と同一の場所であったことが確認できる。

ところが、これらの一里塚は、幕命が下った当初からのものではなく、後年に位置を移して築造されたと思われぬ。何故なら、江戸期の官撰国絵図は、慶長以下天保まで六回作成されていて、その何れにも一里塚の所在を符合で表しているが、前記の位置とは明らかに相違するからである。

国絵図では、吉笹原村の一里塚を瀬崎村に標す。地元の東福寺文書等からその存在を知り得るので、塚の位置が移動したことは明らかである。^{註7}以下、蒲生村の一里塚は草加域の与左衛門新田に、越ヶ谷宿内は瓦曾根村に、下間久里村は大林村に標されている。^{註8}南部藩に伝わる『奥州道中増補行程記』（宝暦元年著作）^{一七五一}には、一里塚の立地状況を詳細に描いていて、旧塚についてまで触れているため、他の資料を複合的に重ねると、それ以外の変動さえ連想させる。日光道中は、度々の付替で日本橋からの距離に相違を生じたことが起因している。しかし、詳細な論述は字数制限から示し得ないため、何れかの機会に考察したいと思う。

明治政府は、近代化の名の下に多くの一里塚を消失させたが、^{註9}越谷には、幸いにも蒲生に東側が現存している。^{註10}日光道のうち埼玉県内では唯一もので、県は文化財に指定した。後世に継承したい遺跡であり大切に保存できればと念願する。

註1. 『東照宮御実紀』慶長九年条に、「二月四日右大将殿の命として、諸国街道一里毎に塚塚(世に一里塚といふ)を築かしめられ、街道の左右に松を植しめらる。(中略)大久保石見守長安之を惣督し、其外公料は代官、私領は領主沙汰し、」とあり、『新編常陸國誌』墳墓条には、「大道中路凡テコノ塚アリ、三十六丁ニシテ道路ノ左右ニ必ズコノ塚ヲ置ク、墳上榎樹ヲ植ユ、古クハ一里山トモ云シニヤ、」と記し、『創業記考異』^五には、「慶長九年八月、當月中秀忠公諸國道路可作ノ由御使相上、廣サ五間也、一里塚五間四方也、関東奥州迄右ノ通也、木曾路同如此」と記載する。また、『新編相模國風土記稿』山西村条には、「一里塚(中略)南側高一丈餘、榎樹ヲ植、北側高一丈二尺餘、榎樹ヲ植、」とある。

註2. 『武江年表』慶長九年甲辰八月閏条に、「二月、日本橋をもとゞ定められ、東海道及び越後陸奥等の諸道へ、一里塚を塚かしめらる。三十六丁一里の積りなり(道の左右へ松を栽えしめられ、夏は木陰に休らひ、冬は風を除きて旅人の裨益となし給へり」と記述し、江戸後期の随筆『兩窓閑話』には、「これ誠に不易長久の遠慮なり、今において往来の旅人歎ぶ事限りなし、其の並松の間を行けば、夏は日をよけ暑を凌ぎ、冬は風を除け散らして惱なし、その上、一里塚と云ふものあれば、今一里々々と思ふ競ひ心の一凶に、この塚を愉しみに道の埒り格別にして、遠近を計り行程の便にする事、天下の人の大なる為なり」とある。尤も、八潮市郷土研究会『跡標』十七輯「知られざる一里塚と脇道ほか」(高橋操氏著)には、必ずしも塚が築造されていたとは限らないとして「讚岐街道や久留米柳川街道・三池街道・薩摩街道等には一里毎に「一里石」・「二里石」・「三里石」等が設けられ」石を置いて里程を示した所もあったという。なお、同氏との懇談で得た絵図と里程に関しては、別途に考究したい。

註3. 『慶長見聞集』(三浦浄心著)に、「常君^{家康}の御時代に一里塚を築くげき由、仰せ出されたり、されば日本橋は慶長八癸卯の年、江戸町割の時新しく出来たる橋なり、(中略)然るに武州は凡そ日本東西の中国^{なかつくに}に当たれりと御定め有りて、江城日本橋を一里塚の元と定め、三十六町を道一里に積り、是より東の果て西の果て五機七道残る所なく一里塚を築かせ給ふ、年久しく治世ならず諸国乱れ辺土遠境の道狭く成る処に、曲たる所をば見計い直に付け、道を拡げ、牛馬の蹄の勞せざるやうに、石を除き大道の両辺に松杉を植え、小河をば悉く橋を掛け、大河をば舟や橋を渡し、日本国中民間往復の便りに供え給ふ事、慶長九年なり」と記す。

註4. 『さいたま歴史街道』の一里塚稿(杉山正司氏著)に、「中山道の旧道といわれる北本市と鴻巣市境の原馬室にも西塚があり、その先鴻巣市箕田から分かれる館林道の行田市下忍にも東塚がある。この館林道は五街道ではないが、御三家などが日光社参の際に通行する脇往還として重要視された道であり、そのため築かれたのであろう。一方、忍藩は自領の秩父大宮に代官所を置いていたので、役人が勤務等のために秩父往還を往復したが、その道に一里塚を築いている。現在は、釜伏峠越のルート上の皆野町平草、小平、曾根坂の三ヶ所に残っている。(中略)この他、史料上から確認できるのは日光御成道旧道の笹久保村(岩槻市)の一里塚がある。」と著述している。

註5. 五街道分間延絵図の内の日光道中編。江戸幕府が街道管理のために、寛政十二年^{一八〇〇}、道中奉行に命じて制作した絵図で文化三年^{一八〇六}に完成。原本は東京国立博物館と通信博物館に所蔵。絵図は彩色され沿道の主な問屋、本陣、脇本陣、寺社などの建造物のほか一里塚、道標、橋、高札等が丹念に描かれている。

註6. 幕府が直轄する五街道と付接する諸道の宿や沿道について精密に調査したものの。宿の戸口、旅籠屋数、問屋、本陣、社寺、人馬賃銭、高札、産業など宿明細帳に近いものと沿道 村の掃除場、産業、一里塚、立場、橋梁等まで詳しく記述している。戸口統計は天保十四年^{一八一三}調べが大部分であるが、安政期頃のものも若干含まれる。原本は通信総合博物館に所蔵。^{一八五四、六〇}

註7. 結城藩家老・水野 織部の随筆『結城使行』(元禄十六年^{一七〇三})には、「善福寺という寺見ゆ、辺り筋に小板橋あり、一里山あり、」と著述しているが、草加の東福寺文書に「宝永八年四月六日、瀬崎村、一里塚、」という記録が遺る。先の吉笹原村より八百メートル程南方に位置しており、少なくとも宝永八年以降に移動したことが伺える。

註8. 盛岡藩八代藩主南部利視の命を受けて、同家臣清水右衛門漆秋全が宝暦元年^{一七五一}に著作し献上したもの。松尾芭蕉の「おくのほそ道」の旅(元禄二年^{一六八九})から六十余年後に当たるが、江戸日本橋から盛岡までの街道界隈の風景が、絵と文章で克明に記されている。

註9. 内務省達乙第二百十号 明治九年十月十日「府県 各街道一里塚ノ儀、里程測定標杭建設既設済ノ地方ニ限り、古墳舊跡ノ類ヲ其ノ儘一里塚ニ相用、或ハ大樹生立往還並木ニ連接シ、又ハ目標等ニ相成自然道路ノ便利ヲナスモノ等ヲ除之外、耕地ヲ翳蔭スル如キ有害無益ノ塚丘ハ総テ廢毀シ、最寄人民へ入札ヲ以テ払下候積相心得、近傍形状況及反別等明瞭ノ図面相副可出、此旨相達候事」とある。

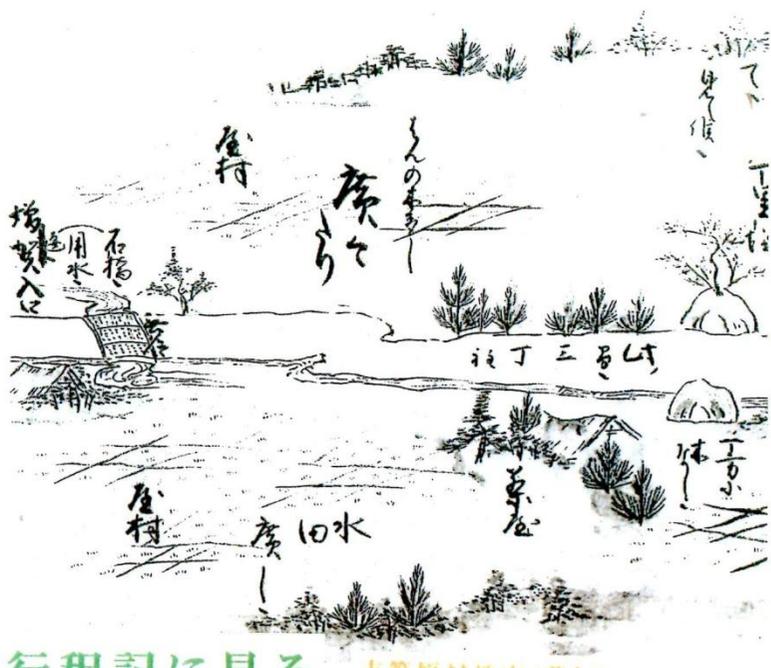
註10. 『越谷の歴史物語』に、「昭和七年農村振救事業の一環として、千住の茶釜橋から日光街道の拡幅工事が施工された。このとき(中略)旧道に平行して水田地に新道が造成された。しかも旧道地域は都市化が及んでいなくなったため、蒲生の一里塚は江戸時代のままの姿で残されていたとみられる」と記述されている。



越谷宿元荒川端



流生村地内

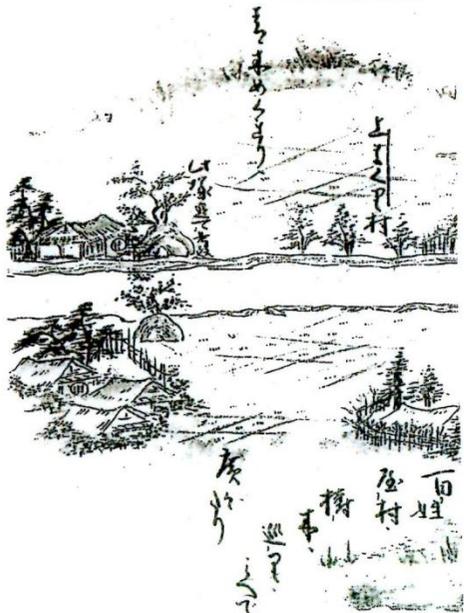


吉野原村地内(草加)

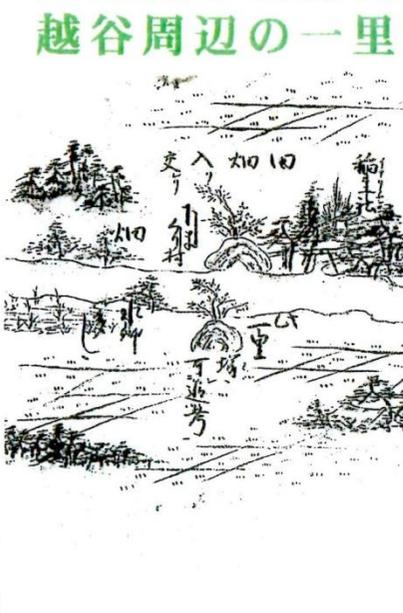
奥州道中増補行程記に見る
越谷周辺の一里塚等の位置



備後村地内(箱塚)



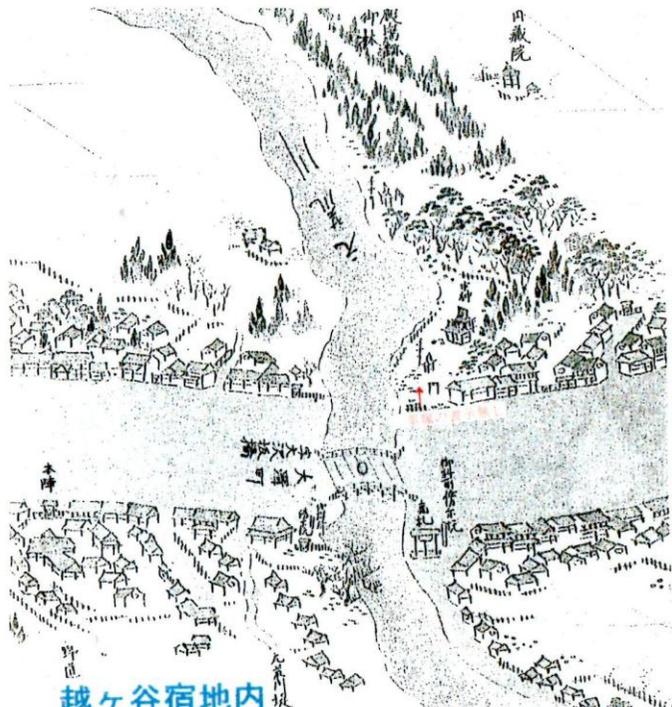
上間久里村地内



下間久里村地内



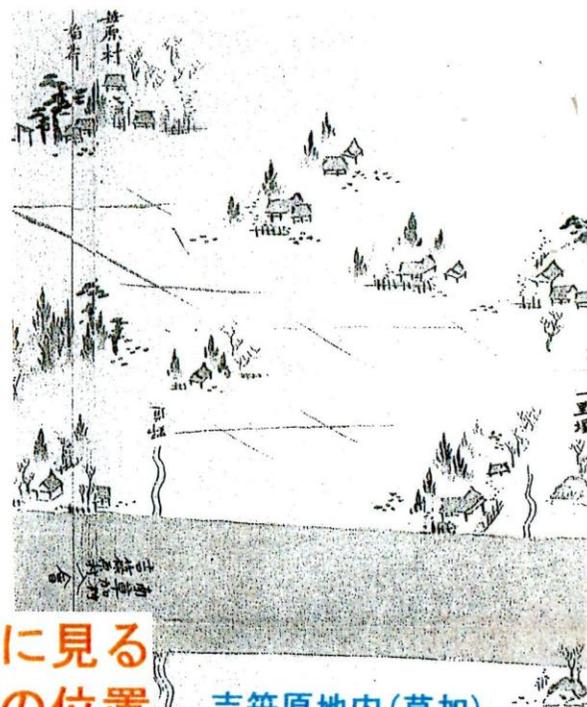
大井村地内



越ヶ谷宿地内

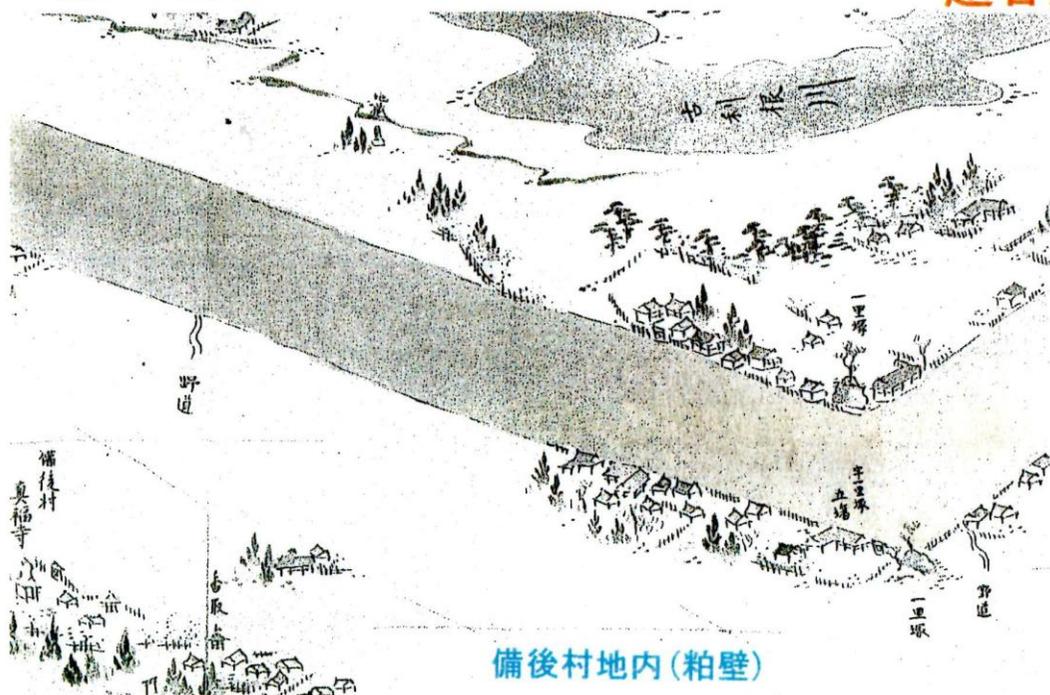


蒲生村地内

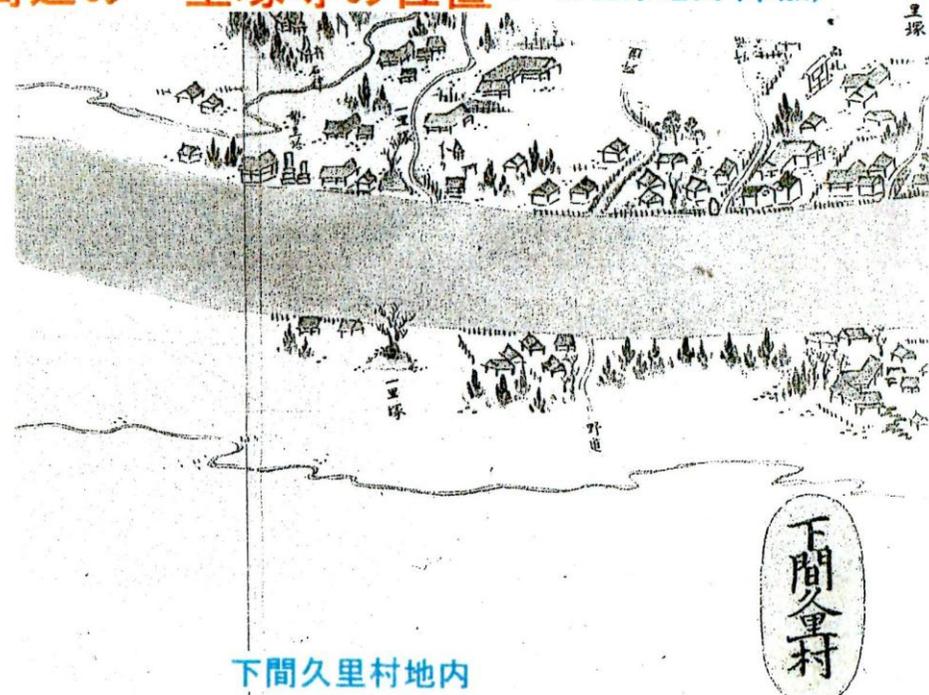


吉笹原地内(草加)

日光道中分間延絵図に見る
越谷周辺の一里塚等の位置



備後村地内(粕壁)



下間久里村地内

下間久里村



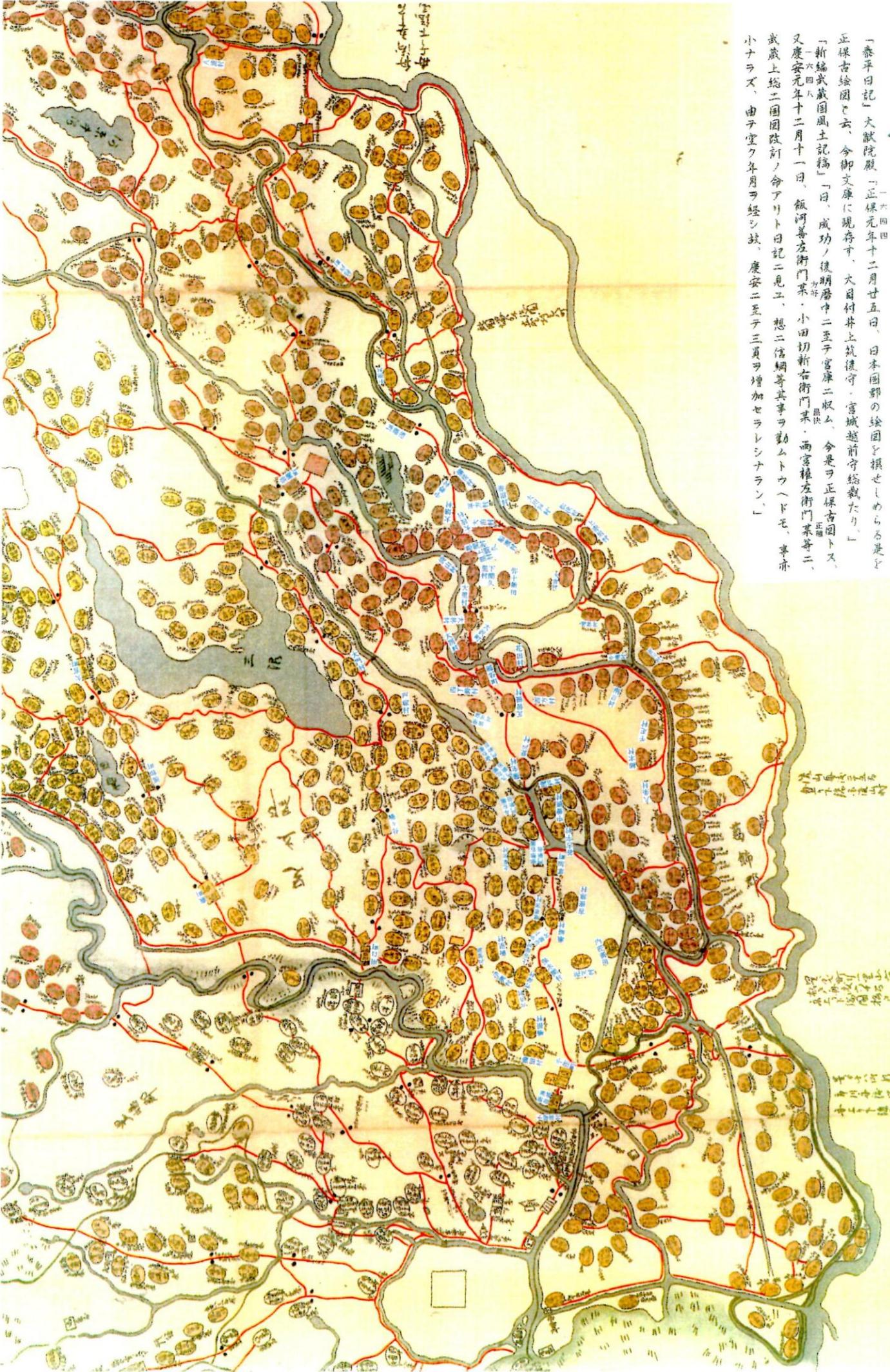
街道の両側に遺る一里塚
成田一里塚(個人所有)

岩手県北上市成田、日本橋から129里(506.6km)、東塚・桜、西塚・樺、広さ13m、高さ3m
一般的一里塚の規模：凡そ広さは5間(9.09m)四方形に外接する円形(内径7間(12.8m)程)で、
高さは1.5~2間(2.7m~3.6m)程度と謂われている。

正保古國繪圖(部分)

「泰平日記」大猷院殿「正保元年十二月廿五日、日本國郡の繪圖を撰せしめらる是と
 正保古繪圖と云、今御文庫に現存す、大目付井上筑後守・宮城越前守鑑載たり。」
 「新編武藏國風土記稿」曰、成功ノ後明暦中ニ至テ宮庫ニ収ム、今是ヲ正保古圖トス、
 又慶安元年十二月十一日、飯河善左衛門某、小田切新右衛門某、両宮庫左衛門某等ニ、
 武藏上総二國圖改訂ノ命アリト日記ニ見ユ、想ニ信綱等其事ヲ勤ムトウヘドモ、事亦
 小ナラズ、由テ室ク年月ヲ経シ鼓、慶安ニ至テ三頁ヲ増加セラレシナラン。」

一里塚記号



武藏上総二國圖改訂ノ命アリト日記ニ見ユ

想ニ信綱等其事ヲ勤ムトウヘドモ

事亦小ナラズ

2. 野島の浄山寺周辺のかつての川筋

（野島は川に囲まれた中州だった）

加藤 幸一

〔野島の浄山寺の山門〕

浄山寺の現在残る山門は、かつては「赤門」と呼ばれた。その南方には用水に架かる太鼓橋があつて、その入口には「総門」が置かれていたという。その「総門」に対して「赤門」は中門の役割を果たしていた。参拝者は、総門をくぐり、太鼓橋を渡り、池の中にあつたまっすぐな参道を進み、赤門に入り、本堂に向かつたのである。太鼓橋は急な坂だったので、女性は橋の両脇の細い道を通つたという。

なお、山門の西側、現在、車が境内に入る入口の所にはかつて黒門があつたという。

〔浄山寺南側の河川の跡〕（推定）

秦野秀明氏によると、「このあたりの戦後の航空写真を見ると、かつては金剛院の西側から末田の田んぼを通り、浄山寺の南の池を通つて流れていたのであろう川の存在が読み取れる」という。

秦野氏のこの指摘通り、浄山寺の南側のかつての池は、河川の跡であり、池の先のさらに東側の川筋は、現在の小曾川と野島の境を通つて元荒川に合流したのであろう。

〔末田の金剛院は川に囲まれた中州〕

中州の可能性を裏付けようと秦野氏は文献による調査を開始した。金剛院に関する文献では元禄十六年作成の『金龍山金剛院来由記』に「武州埼玉郡末田邑中島金龍山妙音寺金剛院」との記述が見られるという。「中島」との表現より、末田村の金剛院がかつて川で囲まれた中州であつたことが推定できる。

さらに秦野氏は、『豊山伝通記』でも金剛院を、「島」・「中島」と略称で記述されているとして、末田の金剛院は、かつては中州であつたに違いないと考え、「シマ」は耕地ではなく、中州を意味しているにとらえた。

〔野島の浄山寺も川に囲まれた中州〕（推定）

私は、野島と大野島の関係は、名前が偶然似ているのではなく、かなり以前から何か関係があると思ひ続けていた。秦野氏の「大野島村が中州なら、野島村も中州である」との仮説から、私の疑問が解けてきた。

野島の「シマ」も単なる耕地と言う意味ではなく、中島と言う意味も含まれているのであろう。それゆえ野島の地は、野島の西側の末田との境、及びその境から元荒川に向けた北方延長上（金剛院の東方二五〇^{メートル}、グラウンド西側）に一本の川筋があつたと思われる。つまり、野島の浄山寺と末田の金剛院との間には川で区切られていて、陸続きではなく、ともに中州（中島）であつたといえるのであろう。しかし秦野氏は、聖なる場所としての一つの中州に二つの由緒ある寺院が建立されたと推定している。

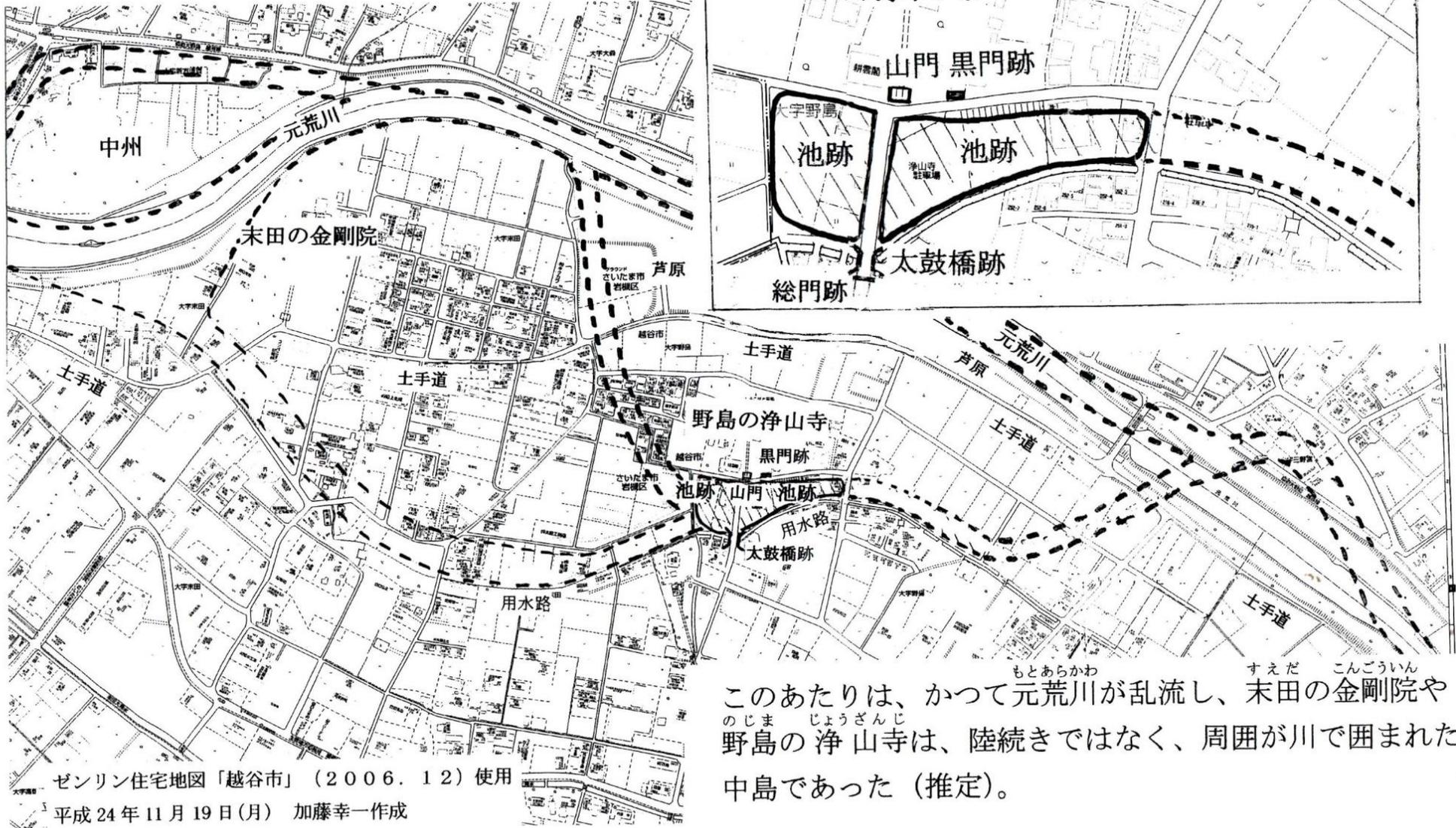
〔大野島の地名の由来は野島〕（推定）

野島の元荒川上流の対岸にある大野島は、大野島の西側に沿つて流れる元荒川と、大野島の東側に大野島を囲むようにして流れていた川（秦野氏が指摘するように、現在の春日部市内の古隅田川から続くかつての大河か）とに挟まれた地域で、さらに「大野島は周りが川に囲まれた中州である」と秦野氏は推定している。

この「大野島」の地名のいわれは、野島の地と比べてより大きな地という意味から、「野島」に「大」を付けたことに由来すると推定することができた。

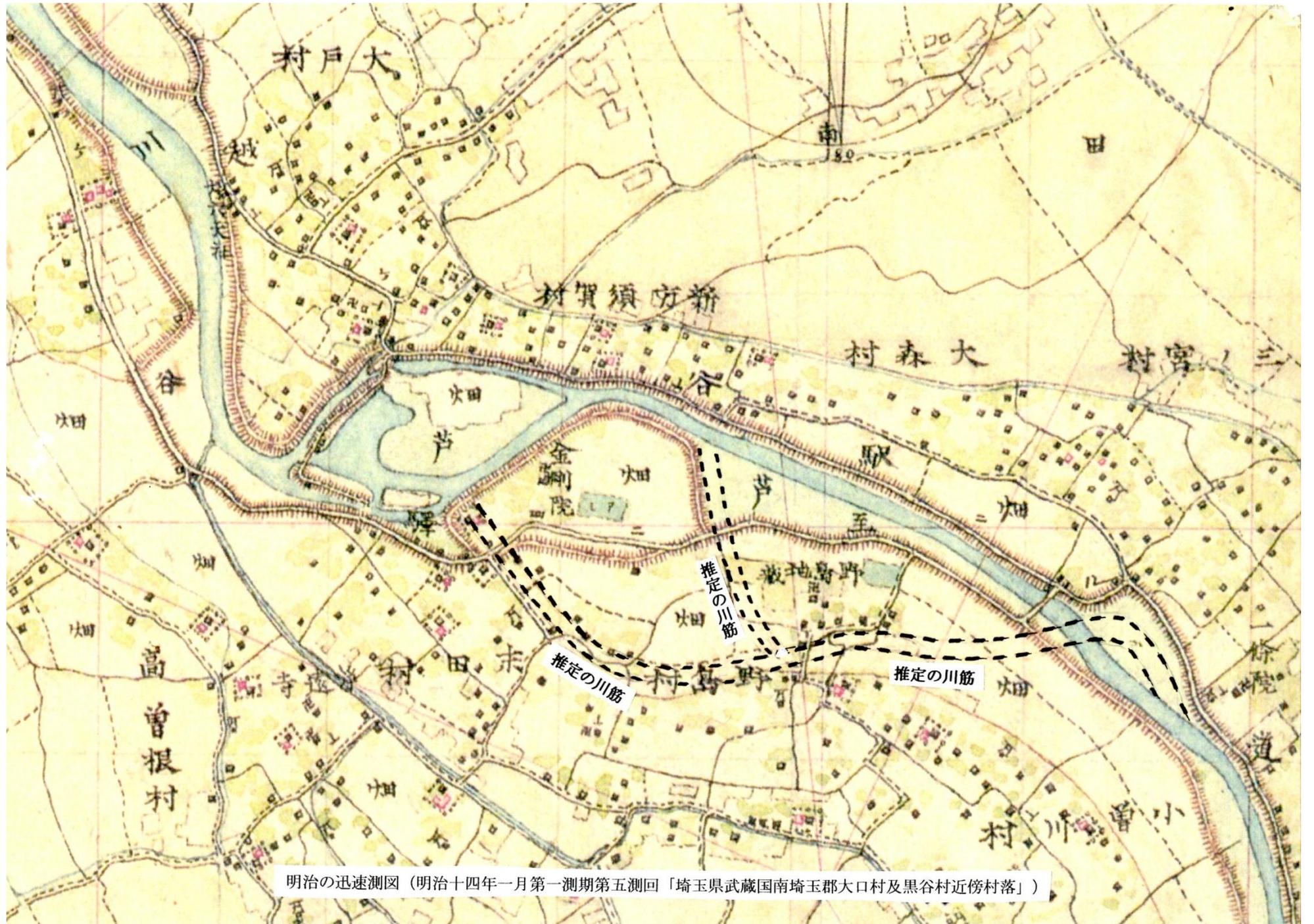
※秦野秀明氏の多大なる協力を得たことをここに記します。

かつての野島の浄山寺の周辺の川筋



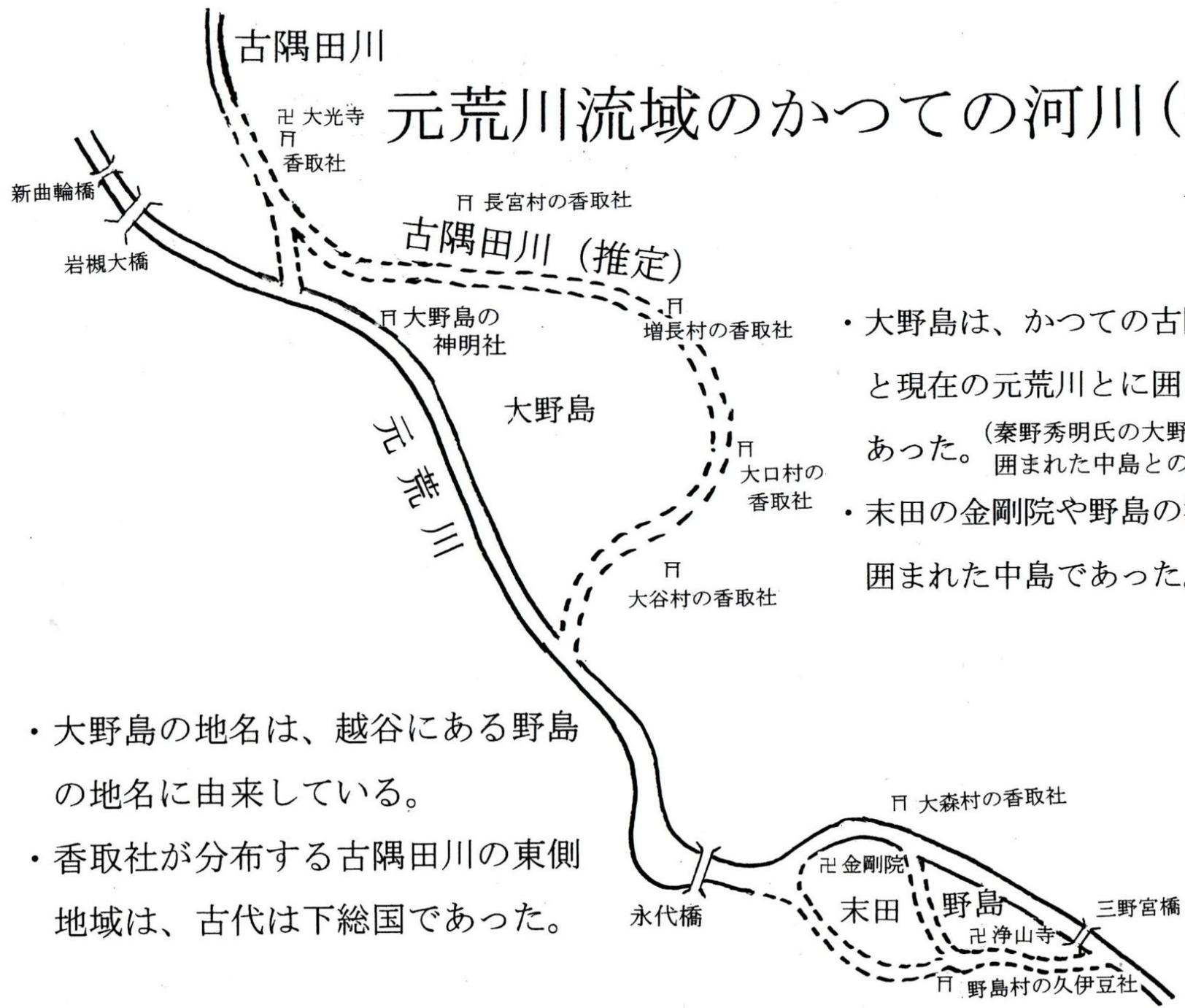
このあたりは、かつて元荒川が乱流し、末田の金剛院や野島の浄山寺は、^{もとあらかわ}陸続きではなく、^{すえだ こんごういん}周囲が川で囲まれた中島であった（推定）。

ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006. 12）使用



明治の迅速測図 (明治十四年一月第一測期第五測回「埼玉県武蔵国南埼玉郡大口村及黒谷村近傍村落」)

元荒川流域のかつての河川(推定)



- ・大野島は、かつての古隅田川(推定)と現在の元荒川とに囲まれた中島であった。(秦野秀明氏の大野島村は川に囲まれた中島との説に従って作成)
- ・末田の金剛院や野島の浄山寺も川に囲まれた中島であった。

- ・大野島の地名は、越谷にある野島の地名に由来している。
- ・香取社が分布する古隅田川の東側地域は、古代は下総国であった。

3. 瓦曾根溜井の変遷

篠原陸郎

上段図

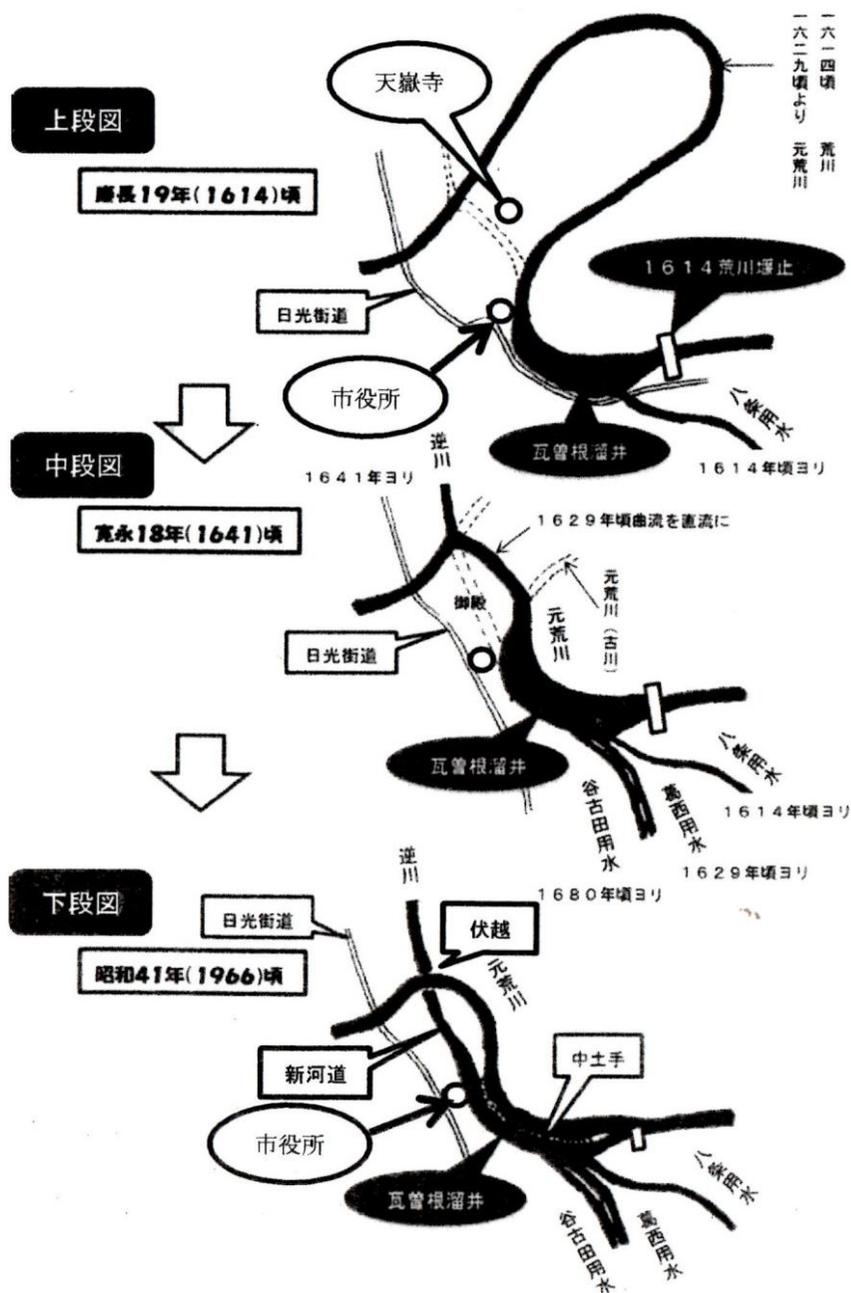
- 慶長19年(1614)
 - 八条領へ用水を引くため荒川をこの地で堰き止める。
 - 八条用水：八条領と四ヶ村の用水
 - 八条領：江戸時代=八潮全域35ヶ村
 - 現代 =八潮20・草加4・越ヶ谷2村
 - 四ヶ村：瓦曾根村・西方村・登戸村・蒲生村
 - 溜井の堰き止めなども原因で、度重なる洪水に幕府は根本的に荒川の治水対策を行う。

中段図

- 寛永6年(1629)
 - 治水対策として幕府は伊奈半左衛門忠治に命じ、利根川の東遷、荒川の西遷の瀬替えを行う。これより荒川・利根川が元荒川・古利根川と呼ばれる。
 - 同時に天嶽寺前の元荒川の曲流を直流の流れに変える。
 - 瀬替えすることにより、こんどは流水が激減し溜井が枯渇するようになる。
 - そこで新たに水源を求めるようになる。
- 寛永7年(1630)
 - 新たに水源を求めるため、まず利根川(中島)より中島用水路を開削し古利根川に導入する。
- 寛永18年(1641)
 - 上記中島用水から古利根川に導入した用水は松伏溜井にて逆川(鷲後用水路)開削、送水し、元荒川に合流させた。
 - 谷古田用水が開削される。
- 延安8年(1680)
 - 上記中島用水も宝永元年(1704)の大洪水によって庄内領内水路が埋没してしまったため、利根川上流の上川俣より導入し琵琶溜井・松伏溜井を通して瓦曾根溜井へと送水した。
- 享保4年(1719)
 - これまでの石堰を廃止し、鉄筋コンクリート造り鋼製水門(10門=赤門)に作り替える。赤門=現地にレプリカ展示

下段図

- 昭和41年(1966)
 - 江戸・明治・大正・昭和と逆川はもともと水位が低いため、元荒川の水が逆流(故に逆川)し、また生活排水が用水に流れたりするため、
 - 逆川を元荒川の下をくぐらせ(伏越)、元荒川と用排水を分離した。
 - 瓦曾根溜井を元荒川と逆川を分離し中土手を築堤した。
 - そのため新たに御殿町・柳町を縦断する新河道を造成。
- 平成9年(1997)
 - 下流地盤沈下対策から旧堰を取り壊し現在の新堰2門にした。



4. 越谷での関東大震災体験者の記録

く 越谷で何が起ったか く

田中 利昌

1923年大正12年、9月1日午前11時58分、ゴーツという不気味なぶい音が地をほうように聞こえたかと思うと突然、強烈な上下動が越谷のまちを襲った。相模湾沖を震源とし、マグニチュード7.9、190万人が被災、10万5千人余りが死亡・行方不明、全壊10万棟余り、全焼21万棟余りの史上最大級の被害をもたらした関東大震災である。埼玉県の被害状況は家屋の全半壊7万戸余り、死者217人、負傷者517人に達した。越谷の被害状況は、即死19人、負傷66人、全壊建物817戸であった。もとも被害の多かった地域は出羽村で7人が即死であった。出羽村の役場職員の記録を見ると、次の様である（現代語訳）。

「9月1日、突然大震災に襲われ、職員一同転ぶがごとく全員前庭に避難したが、辺り一面煙が上り、倒壊家屋は数え切れず、阿鼻叫喚の聲がまわり中で起こっていたので、すぐに重要書類を倉庫に納め、全員各方面に人命の救助に向かった。しかも、助けを呼ぶ者の多くは屋根あるいは梁の下になり、2、3人の人員ではどうすることもできないので、直ちに緊急通報をして消防団を招集し、在郷軍人団の応援を求めて、それぞれ各部所において夕方まで全員救助したが、その間も余震が絶えず困難を極めること筆舌に尽くし難く、ようやく救助された者の数は77名、ついに間に合わず死亡した者および即死した者は井出助役の母親を初めとして8名に達し、重傷者もまた23名を数え、倒壊家屋に至っては実に全村個数の2分の1強に上り、全壊151戸、半壊86戸、倒壊棟数457という数字は、当時の惨状を雄弁に物語っている」

発生初日、東武線は不通になった。各町村では治安維持のため自警団が組織される。余震はなお続き室内では就寝が出来ず、南の空に東京の延焼を眺めながら、不安のまま灯火なき夜を凌ぐこととなる。地震発生の翌日には朝鮮人襲来のデマも広まり、人心はますます混乱する。東京、横浜地方からの被災者が縁者を頼って越谷に避難して来る。川口・蕨・草加では救護所が作られ、炊き出しが行われた。出羽村では1ヶ月間に300名以上が流入し、人口増大のため深刻な食糧不足に陥った。3日には戒厳令により軍隊に治安権限が与えられた。まさに混乱の極みであった。

ここで、越谷で関東大震災を体験された越ヶ谷本町にお住まいの森泉ミヤ様（98歳。震災時8歳）への聞き取りです。越谷市内で一番被害の大きかった出羽村のご出身（七左町）です。

越谷地域の被災状況

	即死	負傷	住家全壊
桜井村			68
新方村			13
大袋村	1	2	44
荻島村		3	33
増林村		4	36
大沢町			19
越ヶ谷町			13
大相模村	5	25	59
出羽村	7	24	151
蒲生村	5	4	13
川柳村	1	4	21
合計	19	66	470

よろしくお願い致します。当時のことをお聞かせ下さい。

「下校し、家族で昼ご飯のうどんを食べていた時のことでした。大変怖かったです。私の家は壊れませんでした。余震が怖くて裏の竹やぶに蚊帳を掛けて寝ました。一軒置きに家が潰れ、地割れがそこら中ありました。朝鮮人が襲ってくる噂（デマ）が広まり、恐ろしかったです」

ご家族はご無事だったのでしょうか。

「奉公に出ていたわたしの姉が家の梁の下敷きになって死んでしまいました。近くに姉と同年の子供が同じ屋号の家に奉公していて、どちらの子供が亡くなったのか分からず、姉と分かったのが午後4時くらいのことでした。死んだ姉を目の前にして、とても寂しかったです」

お辛かったですね。東京から大勢の避難者があつたそうですが。また、食料や負傷者の手当てはどうだったでしょうか。

「東京に住んでいた私の主人は弟を背負って越谷に避難してきたそうです。私の家は農家でしたので、食べ物には困りませんでした。村に病院はなく、家族や自警団が手当てにあたっていました」

今より行政のケアが充実していない当時は、自助・共助が実践されていたのですね。情報の大切さも分かりました。どうもありがとうございます。

5. 四本塚(しほんいり)

秦野 秀明

はじめに

越谷市内大沢地区に存在する「内野塚樋」は、通称「四本塚」と呼ばれる。

「末田・須賀溜井」より塚樋によって引水される須賀用水⁽¹⁾が、「松伏溜井」より直接引水される葛西(鷲後)用水(逆川)を、「伏せ越し」で通過する塚樋である。

本稿では、「内野塚樋(四本塚)」の詳細、来歴、水害記録について、述べることにする。

一 「内野塚樋(四本塚)」の詳細

明治二十年『大沢町地誌』には、「内野塚樋(四本塚)」について、次のような記載がある。

「史料一」

内野塚樋

所在 葛西溜井ノ底ニ埋ム

長 拾八間 幅 横八尺 高四尺

構造 木製 架設年月 慶応三年弍月

雑項 須賀堀ノ水本樋ニ至リ葛西溜井ノ底ヲ通過シ、

曲状ヲナシ増林村地内字古川ニ入ル⁽²⁾

(太字・傍線筆者)

文政五年(一八二二)までに、福井猷貞が著した『大沢猫の爪』には、「内野塚樋(四本塚)」と推定される「内野」の「悪水塚」について、次のような記載がある。

「史料二」

内野

一 悪水塚 長 十八間

横 二間 高 四尺五寸⁽³⁾

(太字・傍線筆者)

二 「内野塚樋(四本塚)」の来歴

天保十一年(一八四〇)に、江澤昭融が著した『大沢町古馬宮』には、「内野塚樋(四本塚)」について、次のような記載がある。

「史料三」

百十 ○四本塚与云事

一 内野耕地須賀用水路の末ニ伏有之候四本塚与ハ、戸前四本有故ニかく云なり、伏越竜塚といふが本名也、天保十亥年ヨリ模様替ニて戸前三本与なる。元禄五年申ノ二月初て御普請被仰付候由、同年之古書物ニ申ノ春内野新塚前後新堀両土手上ヶ場潰地帳与いふあり、森下耕地、内野、飯御免なぞ潰地の改あり、新堀与あるハ須賀堀の事也、同年ニ今の須賀堀も堀割有之事也、しかし須賀用水の事ハ其已前ヨリ水引たる事旧記ニ見へたれハ外ニ堀筋有之候事成べし、模様替ニて今の所に堀替たるもので見へたり、元禄五申二月ヨリ永引与なる、御奉行栗田六太夫殿・石田権野右衛門殿に書上申候事ハ記録ニ有之候、

愚考曰万治四年丑三月七日ニ取置候証文面ニ、須賀堀竣之文言あり、然れハ元禄已前ヨリ之事ハ分明らかたりといへとも、此時分ハ至而細キ堀ニて有之しを、元禄之度改而の御普請ありしと見えたり、其已前ハ今言いふ老本塚之処なりと、夫故此所を元塚といふ、(4)

(太字・カタカナ・傍線筆者)

「史料三」の記載により、「四本塚」の名称は、「戸前」に「四本」有る(5)故に「四本塚」と名付けられたことや、「四本塚」の普請は、元禄五年(一六九二)二月に、須賀用水の流路変更に伴い行われたことなどが判明する。

また、江澤昭融の推定ながら、「四本塚」の普請が行われる以前の万治四年(一六六一)三月七日以前には、既に須賀用水は細流として存在し、その当時の須賀用水の塚樋が存在した場所は、「老本塚」(6)であったことが判明する。

三 「内野塚樋(四本塚)」の水害記録

安政六年(一八五九)八月三日と十日には、「内野塚樋(四本塚)」の北北東・約百mに存在した「観音坊堤」が二度に亘って決壊したことが、旧大沢町S家の「記録帳」に記載(7)されている。

また、昭和二十二年(一九四七)九月のカスリーン[Kathleen]台風により、大沢地区の大部分は浸水被害にあったが、その被害をもたらした決壊地点の一つとして伝承(8)されてきたのが、他ならぬ「内野塚樋(四本塚)」であった。

むすびにかえて

安政六年(一八五九)八月三日と十日の水害、昭和二十二年(一九四七)九月のカスリーン[Kathleen]台風による水害の記録により、大沢地区の「内野塚樋(四本塚)」付近は、防災上注意すべき地点であることが推定される。

(1) 新井信男『中川水系 Ⅲ 人文』、埼玉県、一九九三、四三五頁。

須賀堀用悪水路(延長約四八〇〇間、排水面積約七〇〇町歩)……川通村大字新方須賀から始まって同村大字大森、大袋村大字三野宮の宅地添を経て、大袋村大字大道の耕地を両断し、同村大字大竹、恩間及び桜井村大字上間久里、下間久里、大里ならびに大袋村大字大林と順次宅地添を流れ同村大字大房及び大沢町の耕地を過ぎ、逆川を内野樋管で伏越し地区外増林村大字花田地先で千間堀に合流している。

(漢数字・傍線筆者)

(2) 『越谷市史』第六卷 史料四、一九七五、九一頁。

(3) 福井猷貞『大沢猫の爪』『越谷市史』第四卷 史料二、一九七二、八七頁。

(4) 江沢昭融『大沢町古馬笥』『越谷市史』第四卷 史料二、一九七二、一六三・一六四頁。

(5) 「史料三」(江沢、前掲書注(4)、一六三頁)の記載では、「戸前四本道故ニかく云なり」と記載されているが、原文のコピーを解読した加藤幸一氏により、「道」ではなく「有」であることが判明した。

尚、筆者は「史料三」の「戸前四本有故ニかく云なり」の記載について、「戸前四本(の水路が)有故ニかく云なり」と推定した。

(6) 江沢、前掲書注(4)、一六四頁

百十一 ○壺本塚之事

一 驚後塚之事也、戸前壺本故壺本塚といふ、正徳元年ヨリ御普請ニて御伏込といふ、享保年中川俣賃金割合出入書物之内、葛西堀通ニて三尺の塚樋ヨリ用水引候杯と申文言有之候、尤四本塚之元塚ハ此壺本塚之場所といふ、享保十四亥年迄ハ右壺本塚ヨリ葛西用水を引、大沢・大房・大林・大里・間久り村杯も右塚ヨリ用水表向引候由、然ル処大沢町ハ高役御免之由申立、入用向一切不差出候間出入ニ相成、組合相外申候といふ、其訳ハ中嶋用水之部ニ書記ス、

但古手鏡ニハ用水内野塚与有之、正徳五末年御伏込与あり今云内野底塚与記之候、

(カタカナ・傍線筆者)

福井、前掲書(3)、八八頁。

壺本塚

一 悪水塚 長 六間

横高 三尺

(太字・傍線筆者)

(7) 『越谷市史』第一卷 通史上、一九七五、一〇八四・一〇八五頁。

(8) 『古志賀谷』第一六号、二〇一一、六頁。

大沢地区の驚後にお住まいのS氏によると、「内野塚樋(四本塚)」より下流に存在する通称「大曲(七曲)」においては、堤防が決壊した可能性が高いが、

※ 一九八〇年代前半まで存在した「観音坊池」の位置を、一九八〇年代前半以降に建設された「都市計画道路北越谷駅東口線」の「南側」に描写する資料を散見するが、右の「写真1」から判るように、「観音坊池」の位置は、「壺本坊」のほぼ正面で且つ、「都市計画道路北越谷駅東口線」の「北側」に存在していた。



写真1

「国土画像情報(カラー空中写真) 国土交通省」
 整理番号 CKT-74-15
 撮影年度 昭和49年度(1975年(昭和50年)1月3日)
 撮影コース C9B 写真番号 19
 に加筆して転載

「内野坊樋(四本坊)」においては、田畑等の低い土地の水を排水する目的で、堤防を切ったことを確認している。
 また、大沢地区の鷺後では、「壺本坊」の事を「いっぽういり」、「四本坊」の事を「しほういり」と呼んでいたという事である。

6. 越ヶ谷町百万円事件

日本中を驚かせた『越谷発信』の事件

原田民自

昭和十一年（一九三六）十二月十八日、警視庁よりある事件が二十七日ぶりに解禁されたのを機に、多くの新聞社が事件を一斉に報じた。全国紙で最大級の発行部数を誇っていた東京日日新聞（現・毎日新聞）、読売新聞や国民新聞が号外を発行した。事件の内容は、埼玉県庁の会計課長がその地位を利用して、地方の一町長と通じて県庁名義の偽造文書に知事の官印を盗用して、七年間に百万円を越える巨額を銀行より引き出し、株相場と遊蕩（酒や芸者遊び）に使用したというものであった。ちなみに昭和十年（一九三五）当時の白米十kgは二円五十銭。現在（平成二十五年／二〇一三年）の精米（白米）十kgを三五〇〇円として換算すると、当時の百万円は現在では十四億円という巨額にのぼる。

事件の当事者である有滝七蔵は、大正六年（一九一七）十二月から昭和十一年（一九三六）十二月までの十九年間にわたり、越ヶ谷町の町長を勤めた人物で、現在の越谷市につながる多くの業績を残したことも知られる。在任中の業績の中には、越ヶ谷町に「越ヶ谷駅」を誘致。越ヶ谷実践女学校（越ヶ谷高校の前身）を設立し、同校を県立移管したこと。当時国道であった旧日光街道をアスファルト舗装したことなど数多くあげられる。

事件の発端は、町立であった女学校を県立に移管するための負担金十二万円の捻出（ねんしゅつ）を県地方課で知己の人物に相談したところ、「町債一時借入」という方法と知事官印を文書に押すことで銀行からお金を借り入れることができる方法を伝え、早速、実行した。二人は知事印を文書に押印することで大金を得られることに着目。今度は…と、考えを拡大して七年間で八回にわたり計百二十二万円をだまし取り、途中二十万円余を銀行へ返済した。

だまし取った百万円のうち七、八十万円を有滝町長が主として株相場に使い、相手が受け取った額は約十万円と推定されている。有滝町長は豊富な軍資金で盛んに株の売買に乗り出したが、失敗の連続で、以後、酒色にまぎらわして大尽遊び（遊里などで金銭を多く使って豪遊）をするようになっていった。東京では赤坂、浜町、浅草、向島。埼玉では浦和、熊谷、越ヶ谷の一流料亭や花街に足しげく通い札びらをばらまき、多数の女を囲った。

現職の町長の逮捕で町役場は一時大混乱に陥ったという。その後、二人によって使われた百万円を誰が負担するのとなり、県は「責任なし」と言い張り、銀行は「県を信用して貸したので当然返してもらおう」となった。仮に県民が負担することになると一世帯あたり現在の五千円に相当するが、この顛末が新聞に報じられることはなかった。こうして警察に検挙された二人は大審院判決でそれぞれ懲役八年の刑に処され、有滝は服役後しばらくして越ヶ谷町に戻り町内の病院で亡くなった。私財は全て浦和の銀行に差し押さえられ家屋も整理され、有滝には子供がいなかったため、彼の死により家は途絶えた。

東京日日新聞

昭和十一年
號外
十二月十七日

【録再不】
本報發行所
東京市丸の内區
本町一丁目四番地
電話一〇七〇

本報の社説
は、日本
の前途を
憂へ、國民
の奮起を
期す。...

福前田會計課長“百萬圓事件”の全貌

(日七十月
禁解事記)

縣の公文書を偽造 投機と酒色に蕩盡す

越ヶ谷町長有瀧氏も共謀

騙された鴻池信託



重職に隠れて暗躍 知事九代に及ぶ

發端...有瀧氏の政治的野心

七回に亘り引出す

發覺から收容まで

明後日起訴豫審へ

この十一月十一日依願免官の形
式で退職した越ヶ谷町長有瀧氏
と、同町長に就任したばかりの
南郷玉郎越ヶ谷町長有瀧七藏
五二二兩氏が、鴻池信託の借入
契約書と、鴻池信託の議決
書とを偽造して、米平市野田町
信託株式會社東京支店その他から
百萬圓を借出し、株式投機に遊興に費消し
た公文書偽造行状許欺事件は、浦和地方法
院の審判が、十一月十七日午後二時開始となつた。解禁までに可成りの手配がなされ
た事件は左の如くである。...

有瀧氏は、前年、米平市野田町信託株式會社東京支店に、借入契約書と議決書を偽造し、百萬圓を借出し、株式投機に遊興に費消した公文書偽造行状許欺事件は、浦和地方法院の審判が、十一月十七日午後二時開始となつた。解禁までに可成りの手配がなされた事件は左の如くである。...

有瀧氏は、前年、米平市野田町信託株式會社東京支店に、借入契約書と議決書を偽造し、百萬圓を借出し、株式投機に遊興に費消した公文書偽造行状許欺事件は、浦和地方法院の審判が、十一月十七日午後二時開始となつた。解禁までに可成りの手配がなされた事件は左の如くである。...

讀賣新聞

刊夕

本報發行所
東京市丸の内區
本町一丁目四番地
電話一〇七〇

本報の社説
は、日本
の前途を
憂へ、國民
の奮起を
期す。...

縣債借入れの手配で 七ヶ年に亘る怪犯罪

越ヶ谷町長も共犯として躍る

免官引繼から發覺



三井と鴻池で騙取

投機や遊興に殆ど費消

借りては返へし巧妙に

この十一月十一日依願免官の形
式で退職した越ヶ谷町長有瀧氏
と、同町長に就任したばかりの
南郷玉郎越ヶ谷町長有瀧七藏
五二二兩氏が、鴻池信託の借入
契約書と、鴻池信託の議決
書とを偽造して、米平市野田町
信託株式會社東京支店その他から
百萬圓を借出し、株式投機に遊興に費消し
た公文書偽造行状許欺事件は、浦和地方法
院の審判が、十一月十七日午後二時開始となつた。解禁までに可成りの手配がなされ
た事件は左の如くである。...

有瀧氏は、前年、米平市野田町信託株式會社東京支店に、借入契約書と議決書を偽造し、百萬圓を借出し、株式投機に遊興に費消した公文書偽造行状許欺事件は、浦和地方法院の審判が、十一月十七日午後二時開始となつた。解禁までに可成りの手配がなされた事件は左の如くである。...

有瀧氏は、前年、米平市野田町信託株式會社東京支店に、借入契約書と議決書を偽造し、百萬圓を借出し、株式投機に遊興に費消した公文書偽造行状許欺事件は、浦和地方法院の審判が、十一月十七日午後二時開始となつた。解禁までに可成りの手配がなされた事件は左の如くである。...

= 昭和初期に流通していた高額紙幣 =



7. 越ヶ谷久伊豆神社の「一本幟旗」の秘話

松村 宏司

今から約五十年前（昭和三十二・三年頃）、越ヶ谷の久伊豆神社に存在した「氏子青年の集い」の集会で聞いた話のこと、私がまだ二十歳代の頃に先代宮司の故・小林茂氏、責任総代の故・大野伊右エ門氏などの諸先輩の方々から、神社に関わることに ついての講話を聞くことが出来た。

或る時の集會時に、故・大野伊右エ門氏の話があり、大変貴重なことが語られた。その時のテーマが、久伊豆神社境内に立てられている「一本幟旗」に関することであった。大野伊右エ門氏は「一本幟旗（いっぽんのぼり）」と呼んでいた。以下、その当時の故・大野氏の話を自分の記憶を辿りながら記したいと思う。

お社（やしろ）には幟旗（のぼりばた）は本来左右一対で立てられているのが普通だが、越ヶ谷の久伊豆神社は幟旗が今でも一本で立てられ、多くの参詣の人々がそれをなげなく見てきている。この一本幟旗の設置には次のような理由があったのである。それは、古く明治初期（年代不詳）、当時の四丁野村（現、宮本町）と瓦曾根村（現、瓦曾根）との間で争いごとが起こった。その争いの原因についても故・大野氏の話の中で触れられたが、私の記憶が現在では薄れて定かではないが、それは用水の水の取得に関する争いだったかと思う。両村の間では、なかなか決着することができなかった。そこで両村民ともにその争いを早く収める方法をいろいろと考え苦労したが、最終的には四丁野村側の提案で幟旗の片方の一本を瓦曾根村に渡すことにして、争いを目度く収めることが出来たそうである。従ってそれ以降現在に至るまで、久伊豆神社の幟旗は一本立ててお祭りをしているのである。

以上がその時の講話の内容であった。現在、近郊各地から大勢の人々が参拝に來駕している久伊豆神社の繁栄は、故・小林茂氏及び故・大野伊右エ門氏をはじめ、関係各位のご尽力によるもので、久伊豆神社の氏子の一人として大変喜ばしく思う次第である。

以前の幟旗には、白布に墨字で「久伊豆大明神」と書かれていた。現在では、「鴻澤潤蒼生 昭和四十年 新調 宮本町」と書かれた新しい幟旗になっている。

現在の「久伊豆神社の幟旗 鴻澤潤蒼生」のパンフレットによると、「鴻澤潤蒼生」とは、「こうたく あおひとくさ うるおす」と読み、「天照皇大神宮の大きな恵みが民人々に分け与えられ豊かになるよう」と言う意味である。毎年例大祭（九月二十八日）の月には、宮本町の方々によって幟旗が掲揚される。幟台の正面には「宮本」、裏面には「明治癸未九月 四町野村」と彫っており、昭和四十年に現在の幟旗を新調している。

8. 平田篤胤への山崎長右衛門さんからの一札

宮川 進

本居宣長、荷田春満、賀茂真淵とともに、国学の四大人と称せられる平田篤胤には、全国に数千の門人がいましたが、越谷にも、その熱心な信奉者がおられました。油長・山崎長右衛門さん、塗師市・小泉市右衛門さん、町山善兵衛さんという町の有力者の方々です。山崎長右衛門さんは篤胤が自著を出版するときに、資金を貸したりして、経済面でも手厚い後援をされておられました。

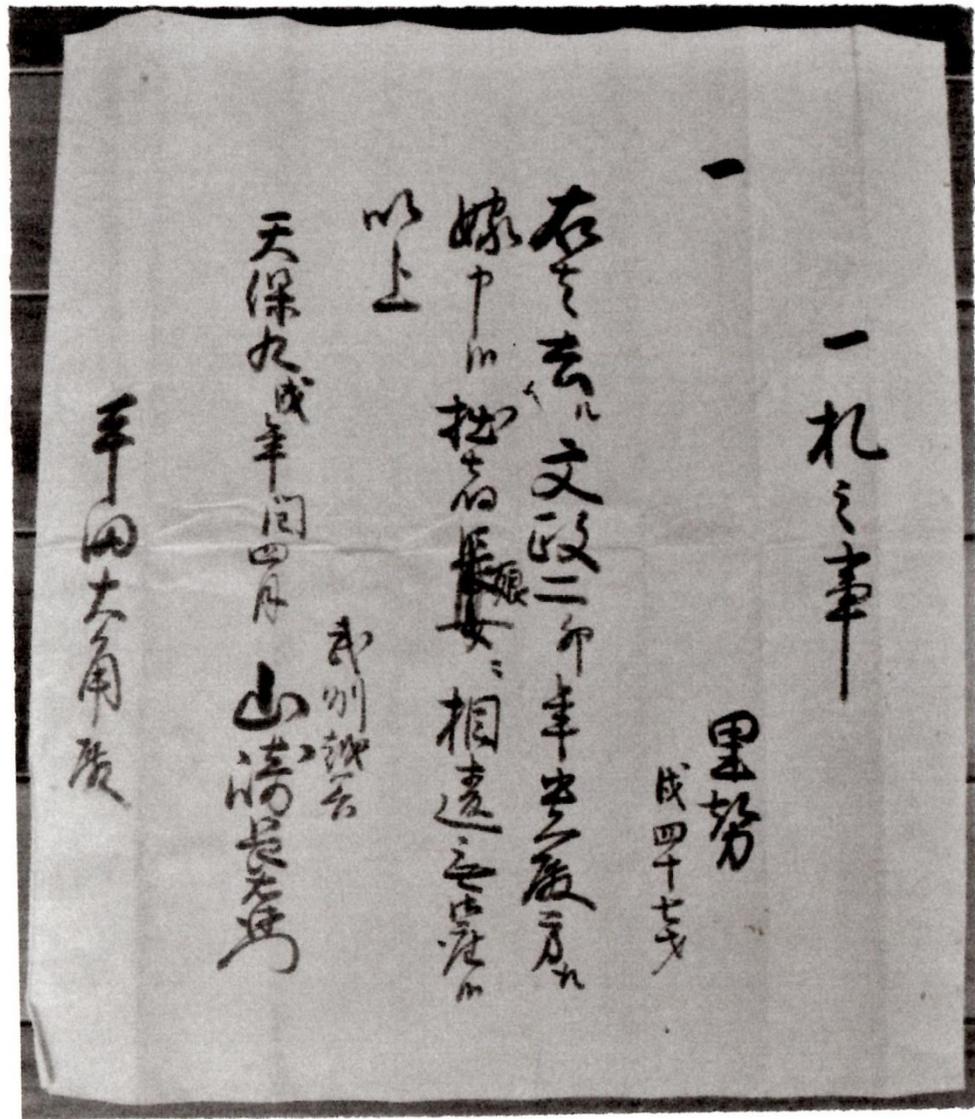
当時、夫人を亡くし、七歳の娘をかかえて、日常生活に不自由していた篤胤に、長右衛門さんは、後妻として、越谷のお豆腐やさんの娘・里勢（りせ）さんを世話しました。（文政元年・1818年） 篤胤43歳、里勢さん27歳のときです。長右衛門さんは、このとき、里勢さんを自分の養女として、小泉市右衛門さんの仲人により、娶わせたのです。

その後、この里勢さんは篤胤の妻として、よく、夫を支えました。幕府にいらまれた篤胤は著述差し止め、江戸払いを申し渡され、出身地である秋田に蟄居しましたが、里勢さんは、夫に、その死（天保14年・1843年）まで連れ合いました。

長右衛門さんのご子孫の山崎家に残る書状（非公開）には「里勢は、私の娘である」と書かれています。そして、書かれたのは、天保9年（1838年）です。娶わせてから20年もたつてから、何のために書かれたのか、不明なのですが、この天保9年は、山崎長右衛門さんが亡くなられた年であり、長右衛門さんは、自分の亡くなったあとの、里勢さんの立場を守るための証拠となるよう、この一札（大角Ⅱ篤胤。これは草稿で、本文は平田家に？）を書いたのではないかと推察されます。何と優しい、長右衛門さんのご配慮でしょう。

里勢さんは、篤胤の亡くなったあと、明治18年（1885年）に93歳で亡くなっています。

（この書状では結婚年次を文政2年としています）



平田篤胤像 「明治維新と平田国学」 国立歴史民俗博物館特別展 図録
同博物館編・刊 2004.9より